8

ところが嘆かわしいことに、プーチンはロバーツ元財務次官の思っているようには行動してくれません。元財務次官はそれを先述のブログで次のように嘆いています（和訳も傍線も寺島）。

ワシントンは、プーチンの言う「レッドライン」が架空のもので、本当にそれが「越えてはならない一線」であり、それを越えた場合、徹底的に反撃すると決意している人物としてプーチンを見ていない。

ウクライナ国内のインフラに対する攻撃は、遅ればせながら、最近やっとおこなわれた。今年二月にウクライナと戦争状態に入って、8カ月も経ってからだ。だから「ネオコン」と呼ばれる連中は、それを、クリミア大橋を爆破しようとしたウクライナにたいする弱々しい反撃だとしか見ていない。

それは、単に「目には目を」という報復活動に過ぎず、「このままいくと破滅に直面する」という危機感を、ウクライナにいだかせるものではなかったからだ。

今までのロシア軍の戦闘は、ドンバスに侵略してきたウクライナ軍を領土から追い出すという、警察的な活動にすぎなかった。だからクリミア大橋の爆破にたいする反撃も、その程度のものだと思わせている。

このような助言や嘆きを、ロシアの敵国であるはずのアメリカの元財務次官が書いていることに私は尽きぬ興味を感じるのですが、それはともかくとして、ロバーツ元財務次官が次のように言っていることに注目したいと思います。

「ウクライナ国内のインフラにたいする攻撃は、遅ればせながら、最近やっとおこなわれた。今年二月にウクライナと戦争状態に入って8カ月も経ってからだ。だから『ネオコン』と呼ばれる連中は、それを、クリミア大橋を爆破しようとしたウクライナに対する弱々しい反撃だとしか見ていない」

ここで、「ウクライナ国内のインフラに対する最近の攻撃」と元財務次官が言っている攻撃とは、どのようなものだったのでしょうか。

9

確かにロシア軍は、二〇二二年二月二四日にウクライナ進攻を開始したとき、ミサイルは使わずに地上軍のみでおこないました。これが今回のようにミサイルを使った攻撃であれば、3日で終わっていたかも知れません。

この進攻が始まったとき、アメリカの著名な経済学者マイケル・ハドソンが、「こんなに早

くアメリカの崩壊が始まるとは夢にも思わなかった」という驚喜の声をあげたのも、その辺に理由があったのかも知れません。

しかしロシア軍はミサイルを使わずに電光石火のごとくウクライナ全土に出撃し、短時間で撤退してしまいました。首都キエフの近く、ブチャまで進撃していたにもかかわらず、あっという間に撤退してしまったのです。

そのなかで生まれたのが「ブチャにおける虐殺事件」と呼ばれるものでした。

これをキエフは「ロシア軍による虐殺事件」として宣伝し、それを欧米のメディアも連日のように報道しました。しかし、これについては、スイスの諜報機関の元幹部であり地政学の専門家として広く尊敬を集めているジャック・ボーが次のような事実を明らかにしています。

イギリスは当時、国連安保理の議長国だったが、ブチャの犯罪に関する国際調査委員会の設置を求めるロシアの要請を三度にわたって拒否した。

ウクライナの社会党議員イリヤ・キバはテレグラムで、ブチャの悲劇は英国の特務機関MI6が計画し、SBU（ウクライナ保安庁）が実行したことを明らかにした。

＊Jacques Baud: Operation Z「ジャック・ボーへのインタビュー『特別作戦Z』」

http://tmmethod.blog.fc2.com/blog-entry-1080.htm（『翻訳NEWS』2022/10/08）

なぜウクライナ軍は自国民を虐殺したのでしょうか。ボー氏は上記のインタビューでは、それについて何も述べていませんが、たぶんロシア軍を歓迎したブチャ住民にたいするウクライナ軍の報復攻撃ではなかったのかと推測されています。

キエフ政権は国内の親露派を次々と殺してきましたから、これは十分に考えられることです。親露派の市長がこれまでに4人も殺され、11人もの市長が行方不明になっていることは『ウクライナ問題の正体2』（61-63頁）で詳述しました。

10

それはともかく、ロシア軍は首都キエフの近くブチャまで進攻していたのに、あっという間に撤退してしまいました。これは当初から疑問を呼んでいた行動でしたが、今の私には、その理由がよく分かります。

というのは、ロシア軍の当初の狙いは、ウクライナ全土に30～46カ所にもわたって展開されている生物兵器研究所の存在と実態を明らかにすることだった、と思われるからです。

そして、この作戦はみごとに成功し、ロシア軍は多くの物的証拠を入手しました。

その中には、渡り鳥に細菌を運ばせて敵国を攻撃するという研究も含まれていて、アメリカが自分の国ではなくウクライナの地で危険な研究をさせていることの理由が少し分かった気がしました。

しかし、ここではその詳細を記しているゆとりはありませんので別の機会に譲ります。ただ、ヌーランド国務次官がアメリカ議会専門委員会の公聴会(2022/03/08)で、そのような研究所の存在を認め、「ロシア軍の手に不利な物件が渡らないよう努力している」と答えたことだけは、ここに記しておきたいと思います。

生物兵器研究所の証拠物件がロシア軍の手にわたらないよう破棄したと公聴会で証言したヌーランド国務次官
https://www.rt.com/russia/551510-nuland-ukraine-biolabs-attack/

さて、生物兵器研究所の存在を調べた後のロシア軍の行動は、ウクライナ南部、とりわけドンバス2カ国に住むロシア語話者の命と生活を守ることにむけられました。ウクライ

ナ軍によって連日のように砲撃・虐殺されてきたからです。

そして、ウクライナ軍の主力となっているネオナチ部隊（アゾフ大隊）が拠点を構えているマリウポリ市の解放に主力が注がれました。そして最終的には、マリウポリ市の製鉄所に立て籠もったアゾフ大隊を「玉砕」ではなく「投降」させることによって、戦いの第一局面は終わりました。

そして次に、欧州最大の原発をかかえるザポリージャ州とその隣のヘルソン州を含めた４つの地区を、住民投票の成功を通じてロシアに併合することで、ウクライナ戦争の第二局面は終わったと考えてよいと思います。

しかし、ロシアにしてみれば、ドンバス２カ国だけでなくザポリージャ州とヘルソン州を加えて、ウクライナと直接に向き合う国境線が１０００キロも伸びたことになりますから、それを防衛するために、ロシア軍も新しい編成が必要になります。

そこでプーチン大統領は「部分的動員（Partial Mobilization）」を発令することにしました。これは「全面的動員（Full-scale Mobilization）」とは違って、戦闘経験のある予備役兵の動員にしぼられたものでした。

この動員は、本来は動員対象者になるべきひとの1％だけにしか声がかけられていないので、規模としては必ずしも大きくはないのですが、それでもウクライナをめぐる戦闘は、ひとつの大きな節目を越えたことになります。

11

このような経過を考えれば、これまでの「特別作戦Z（Operation Z）」は、まずまずの戦果をあげたと言って良いのではないかと思います。

とはいえ、この間（かん）、多くの血が流れましたし、ノルドストリーム1・2もクリミア大橋も破壊されました。ウクライナで活動していた多くのジャーナリストが殺されました。殺されなくても、「暗殺リスト」に載せられ死の脅迫を味わいながら取材活動を続けているジャーナリストも、少なからず存在しています。

そしてジャーナリスト・言論活動をおこなうひとへの暗殺は、ウクライナ国内を越えてモスクワにまで及びました。それがダリア・ドゥーギナの暗殺で、これは国際世論に小さくない反響を呼びました。

が、欧米のメディアは概してこれを重大視しない態度をとり続けてきました。

これはノルドストリーム１・２の爆破についても同じでした。この爆破で直接の影響を受けＥＵ経済が崩壊するかも知れないのに、しかも犯人はほぼ分かっているにもかかわらず、この爆破をきちんと批判する目立ったメディアは多くありませんでした。

これに味を占めたのでしょうか。キエフが次に取った行動が「クリミア大橋の爆破」でした。しかも、これはプーチン70歳の誕生日に合わせて実行されたのですから、さすがのプーチン大統領も堪忍袋の緒が切れたのでしょう。

プーチン大統領が取った行動は、「アルマゲドン将軍」という異名をもつほどの猛将セルゲイ・スロヴィキン（Sergey Surovikin）を、新しくロシア軍ドンバス管区の「総司令官」に任命することでした。次の記事はそのことを報じたものです。

＊'General Armageddon' to lead Russian forces in Ukraine
Sergey Surovikin, a Syria campaign veteran, will take command of all operations, the Defense Ministry said
「ウクライナ戦線に、ロシアの『アルマゲドン将軍』参戦。シリアでの戦いで鳴らした百戦錬磨のセルゲイ・スロヴィキン将軍が、全ての作戦の指揮を執ることになる、と国防省は発表」
http://tnmmethod.blog.fc2.com/blog-entry-1098.html（『翻訳NEWS』2022/10/22）

12

この記事はセルゲイ・スロヴィキン将軍について次のように紹介しています。

「アルマゲドン将軍」という異名をもつほどの猛将セルゲイ・スロヴィキン

彼は二〇一七年からロシア航空宇宙軍司令官を務めるベテラン将官。同年、シリアでの軍事作戦での活躍が評価され、ロシアの英雄の称号を授与された。それ以前には、チェチェンでの戦闘にも参加している。

各種メディアの報道によると、スロヴィキンは、軍事作戦にたいして強力で型破りな戦術を取ってきたので、同僚から「アルマゲドン将軍」というあだ名を付けられたという。

この将軍にたいする期待は世界各地から寄せられてきていますが、次の論考はそのひとつです。この「アルマゲドン将軍、ついにリングに登場」という題名そのものが、セルゲイ・スロヴィキン将軍にたいする期待を表しています。

＊General Armageddon Enters The Ring（アルマゲドン将軍、ついにリングに登場）
https://strategic-culture.org/news/2022/10/13/general-armageddon-enters-the-ring/October 13, 2022

このニュースを報じたデクラン・ヘイズ（Declan Hayes）について、

このサイト編集者は次のような副題を付けていました。

＊To call the savages General Armageddon faced in Syria or the Nazis he now faces in Ukraine devils would be to libel devils, Declan Hayes writes.（アルマゲドン将軍がシリアで直面した獰猛なイスラム原理主義者や、いま彼がウクライナで直面しているネオナチを「悪魔」と呼ぶことは、悪魔にたいする誹謗だ、とDeclan Hayesは書いている）

つまりウクライナのネオナチ勢力は悪魔よりも残酷で、悪魔の方が「自分はそんなに非道くない」「それは俺を誹謗することだ」と言いそうだと、デクラン・ヘイズは言いたいのでしょう。

13

さてロシア軍「ドンバス管区総司令官」に任命されたスロヴィキン将軍がさっそく取った行動は、ウクライナ全土へのミサイル攻撃を命じることでした。

この攻撃は2日間連続でおこなわれ、「ウクライナのエネルギー・インフラ70施設が攻撃を受け、その結果、同国の発電能力の50％が失われた」と次の記事は報じています。

＊Russia releases map of missile strikes against Ukraine（ロシアはウクライナへのミサイル攻撃地図を発表）
https://www.rt.com/russia/564577-ukraine-strikes-energy-volodin/　13 Oct, 2022

ウクライナ全土へのミサイル攻撃、攻撃を免れたのは３地区のみ

と同時に、この記事は、ウクライナ全土の攻撃地図も載せています。それが、上の地図です。それを見れば分かるように、攻撃を免れたのは三つの地区だけで、多くの地区では停電を余儀なくされました。

しかし、このミサイルによる爆撃では電力のインフラが主として攻撃されただけで、民家への被害は原則としてありませんでした。

ですから、全土への攻撃がおこなわれた割りには、失われた人命は驚くほど少なかったのです。いま手元に資料がないので正確な数は分かりませんが、たしか10名程度の死者だったと思います。

ゼレンスキー大統領の官邸近くも爆破されましたが、ゼレンスキー自身は全くの無傷でした。

ウクライナ軍による攻撃と、何という違いでしょう。今までのウクライナ軍の攻撃はロシア語話者の「民族浄化」を兼ねていましたから、民家や公共施設を爆撃するのは日

常茶飯事（さはんじ）でした。そのなかで、子どもを含めて、１万３０００～４０００人もの命が奪われたことは、既に何度も述べたとおりです。

14

しかし、この攻撃は２日連続でおこなわれただけでいったん中止されました。だから、考えようによっては「なんだこれだけ？」という印象を与えたかも知れません。

これがロバーツ元財務次官に、このミサイル攻撃は「このままいくと破滅に直面するという危機感をウクライナにいだかせるものではなかった」と言わせた理由だったのでしょう。

というのは、このミサイル攻撃の後すぐウクライナ軍は、ルガンスク共和国の庁舎をミサイル攻撃し、庁舎の大半が破壊されているからです。もしゼレンスキー大統領の官邸がミサイル攻撃を受け大破されていれば、ルガンスク共和国の庁舎爆破もなかったかもしれません。

キエフが「このまま行くとやばい」と感じるほどの恐怖をゼレンスキー大統領に与えていれば、このような攻撃に出ていなかったかもしれないからです。

このようなことを考えると、ロバーツ元財務次官が言っていたことも半分は当たってい

るのかも知れません。

しかしプーチン大統領は一貫して人的被害を避けるという方針を貫いてきましたから、それはそれで高く評価すべきなのかも知れません。

15

ところが、EU幹部もEU諸国の首脳も、「ミサイルでウクライナを攻撃することは戦争犯罪だ」と非難しました。

が、いったいアメリカやイスラエルは、どれほど多くのミサイルを、イラク、シリア、パレスチナ、そしてアフガニスタンに、撃ち込んできたでしょうか。それにたいしてEU諸国は一度たりとも非難したことがあったでしょうか。

またウクライナ軍がこれまでにどれだけの砲撃やミサイル攻撃をドンバス2カ国に加えてきたでしょうか。その間にどれだけの民家や公共施設が破壊され、どれだけのひとが殺されたでしょうか。

そしてEU幹部もEU諸国の首脳も、このような事実に、どれだけ非難の声をあげたでしょうか。私の知るかぎり一度もありません。

にもかかわらず、ロシア軍のミサイル攻撃にだけ「戦争犯罪だ」という声をあげたということは、いかに彼らが今回のウクライナ全土へのミサイル攻撃に恐怖したかを示しているように、私には見えます。

ですから、このアルマゲドン将軍が、引きつづき、ロバーツ元財務次官の期待するような戦果をあげることができるかどうか。それが今後の見物（みもの）です。

そして、その戦果を元に、一刻も早くドンバスに平和が訪れることを願ってやみません。

〈追記〉

本稿では、スイスの諜報機関の元幹部であり地政学の専門家として広く尊敬を集めているジャック・ボーを、「ブチャの悲劇は英国の特務機関ＭＩ６が計画し、ＳＢＵ（ウクライナ保安庁）が実行した」ことを暴露している人物としてのみ紹介しました。

＊ Jacques Baud: Operation Z「ジャック・ボーへのインタビュー『特別作戦Z』」http://tnmmethod.blog.fc2.com/blog-entry-1080.html（『翻訳NEWS』2022/10/08）

しかし実はジャック・ボーは、『特別作戦Z』という本を著(あらわ)していて、前頁のインタビューは、この本をふまえておこなわれたものです。二月二四日以降のロシア軍の展開を理解するうえで必読資料だと思いました。時間のある方は、次の論考と併せて、是非お読みください。

＊ Kharkov and Mobilization「ジャック・ボー：ハリコフからの撤退とロシア軍の新動員について考える」http://tmmethod.blog.fc2.com/blog-entry-1077.html（『翻訳NEWS』2022/10/06）

〈本章のキーワード〉

アレクサンドル・ドゥーギン（Alexander Dugin，ロシアの哲学者）
ダリア・ドゥーギナ（Darya Dugina，アレクサンドル・ドゥーギンの娘。暗殺）
オレスィ・ブジナ（Oles Buzina，ウクライナの作家・歴史家。暗殺）
オレグ・カラシニコフ（Oleg Kalashnikov，ウクライナの政治家。暗殺）
エバ・バートレット（Eva Bartlett，カナダの女性記者）
イーロン・マスク（Elon Musk，航空宇宙メーカーSpaceXの経営者）
ヘンリー・キッシンジャー（Henry Kissinger，元アメリカ国務長官）

セルゲイ・スロヴィキン（Sergey Surovikin，ロシア軍ウクライナ管区総司令官、別名「アルマゲドン将軍」）
ポール・クレイグ・ロバーツ（Paul Craig Roberts，元アメリカ財務次官）
ジャック・ボー（Jacques Baud，スイスの元諜報機関幹部）
ミロトウォレッツ（Mirotvorets［英語ではPeacemaker］ウクライナ政府が半ば公認している暗殺リスト）